



家入たつ子さん

家入さんが触っているのは「視覚障害者用ポータブルレコーダー」。これを使って声の広報おおづや音声図書を聞いています

視覚

「網膜色素変性症」という障がいがある家入さん。不便なことがありますが、その満面の笑顔の源流である生活の楽しみ方を聞いてみました。

白内障だと思っていたら—
子どもの頃から光に弱く、暗いところが見えにくいなと思っていました。そのときは病院に行かなかったんです。その後、少しずつ悪くなってきたので40



家入さんが外に出るときに欠かせない「白杖」(はくじょう)。今で3代目だそう。「これを持っていると目が見えづらいことが分かってもらえるのでいいですね」

歳の時に検査を受けたら「網膜色素変性症」と聞いたことがない病名でした。難病に指定されていて治療法はないようです。
見えない世界を想像してみてもいいですね。

物の形や色が分かりにくいので外に出るときは誰かの付き添いが必要です。外の世界は視覚に障がいがある人には障壁が多くあります。だから困っている感じだったら声を掛けてくれるなど、相手が見えなくてもいいかなと思ってもらえるとうれしいですね。

今は楽しみがたくさん

障害福祉サービスの支援を使って、熊本市に買い物に行ったり、好きなコンサートに行ったり、まだまだやってみたいことはたくさんありますね。



平山健二さん

平山さんと話をしていると手話とは手の動きだけでなく、顔や動きが大事なことが分かります。取材時も笑顔で私たちに伝えてくれました。実は写真の腕前もプロ級で、いろんな賞を取られているようです

理解しようと 想う気持ちが大事

聴覚

先天性の聴覚障がいのある平山さん。コミュニケーションを取るときは手話を使います。平山さんが思う聴覚障がい者が抱える困りごとや配慮の仕方について話を聞きました。

**聞こえないだけじゃない
文章だけでは
認識に行き違いも**

す。言葉が聞こえると理解しやすいですが、聞こえないと文字だけで判断しないといけません。文字でコミュニケーションを取るときは要旨を簡単にまとめて書いて伝えることが大切です。

生まれたときから全く音が聞こえない平山さんは補聴器をつけても音が聞こえません。普段は手話を使いますが、手話を使わないときは文字や口の動きでコミュニケーションします。

「手話が分からない人とは文字を書いてやりとりをするのですが、書いてある文章の意味が分からないことがあります。文章の意味をつかむのが難しく、お互いの認識

**手話が使えなくても
伝えたい気持ちがあれば
相手の気持ちは伝わる**

手話に寄り添って会話をするように、理解しようと思ふ気持ちが大事で、相

えられる文章ではなく、簡潔に書いてもらえると理解しやすいですね」と話します。

「しない」。この言葉は否定にも質問にも捉えられます。同じ言葉でもイントネーション次第で意味が変わるのが日本語で

ると自然と口元を大きく話したり、身振り手振りで伝えたりします。それが一番大切です」
聴覚に障がいのある人でも手話を使わないこともあるので相手に伝わる方法で会話すること意識してみましょう。

more Voice - いろんな声 -

聴覚障がいのある人がいる家族の声

私の夫と2人の息子には聴覚障がいがあります。聞こえ方はそれぞれに違いますが、話し掛けるときは口元が見えるように大きな声で話したり、聞こえないときは、机をたたいて振動で気付いてもらうなど配慮をしています。聴覚障がいは見た目では分かりにくいので、話し掛けて反応がないときは無視していると誤解されることもあります。また自分の話す声量が分かりにくいようで、夫は、私に話し掛ける声やドアを閉める音が大きくなりがちで、誤解されることもあるのかな、と思っています。

障がいがあることは、私たちにとっては当たり前の生活です。30年以上一緒に生活していますが、私が気付いていないこともまだまだあります。

障がいのある人たちが暮らしやすい社会になるためには、本人が自分に障がいがあることをきちんと伝えられることと、周りが理解してそのことを分かってくれることが大事だと思います。(石丸リエさん)

視覚障がいのある夫婦の声

私たちは「正常眼圧緑内障」や網膜剥離などでほとんど目が見えないのですが、見えていたものが少しずつ見えなくなるのは本当につらいです。

家でも外でも動くだけで物にぶつかりますし、物が落ちてどこに落ちたの分かりません。移動にも時間が掛かります。見えないという困りごとには、きりがありません。

私たちは視覚に障がいがあっても耳は聞こえます。音だけが頼りなので、困ってそうだなと思ったときは名前を言って「お手伝いしますよ」などと声を掛けてほしいですね。

視覚障がいがある人は、白杖を持ったり、盲導犬と歩いたり、そのことで視覚に障がいがある人だと分かることがあるので、それに周りの人が気付いて、声を掛けてくれる人や掛け方などを配慮してくれる人が多い社会を望んでいます。

(山崎浩二さん、とも子さん)